

報告事項シ

県立学校第三者評価の結果について

県立学校第三者評価の結果について、別紙のとおり報告します。

平成23年3月19日

鳥取県教育委員会教育長 横 濱 純 一

県立学校第三者評価の結果について

高等学校課
特別支援教育課

1 実施の方針

平成22年度から、各年度毎に県立学校8校（高等学校6、特別支援学校2）において第三者評価を実施し、4年間で一巡する（鳥取聾学校ひまわり分校は1校と考える。）

試行実施校（八頭、倉東、米子、境総合、鳥盲、倉養）については、平成25年度に実施する

2 平成22年度の評価スケジュール

（1）評価対象校の決定（4月末）

鳥取東、智頭農林、倉吉西、倉吉総合産業、境、日野、鳥取養護、皆生養護の8校に決定

（2）「第三者評価機関による鳥取県立学校評価実施要領」の制定（6月15日）

（3）第1回第三者評価委員会（6月28日、県庁）

評価委員の委嘱及び評価チームの編成、担当校の決定

評価委員の研修の実施

評価基準・評価方法等の確認

（4）学校訪問（7月～11月、各評価対象校）

各校2日間の学校訪問による聞き取りを実施

（5）第2回第三者評価委員会（2月21日、県庁）

評価の決定

（6）評価書の交付（3月1日）

（7）評価対象校による改善計画書の提出（3月末）

3 平成22年度の評価委員（敬称略）

氏名	役職等
山岸 正明	セコム山陰（株）鳥取営業所 顧問
秦野 諭示	鳥取環境大学情報システム学科教授
西田 英樹	鳥取大学総合メディア基盤センター長・教授
岡野 幸夫	鳥取短期大学国際文化交流学科准教授
寺川 志奈子	鳥取大学地域学部地域教育学科准教授
西原 定代	（株）協和製作所鳥取工場アドバイザー
高橋 哲夫	東部生コン（株）代表取締役社長
内田 八孝	ダイヤモンド電機（株）総務部 鳥取総務課 課長
入江 ゆみ子	NPO法人鳥取県自閉症協会 理事
井上 善弘	（財）鳥取県教育文化財団理事長
伊藤 哲雄	倉吉市教育委員長
石破 君代	元鳥取聾学校長

平成 22 年度 鳥取東高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

重点目標を「しのめプロジェクト」として明示し、目指す方向の共有化が図られている。校長の示す学校経営ビジョンは全職員に浸透し、校務分掌組織は部内での教職員の補完体制ができており、主任クラスが実働しているなど、チームとしてうまく機能している。教職員は日々の教育活動に意欲的に取り組んでおり、士気は高いと感じた。

以下は、委員会として高く評価し、今後も継続していただきたい主な事項である。

- ① 授業改善に向けた個々の教職員の意識は高く、外部人材の活用が積極的に図られ、「鳥取学」校外学習やコミュニケーション技術の向上等、新たな取組みも実施されている。
- ② 部活動の加入率は普通科進学校としては極めて高く、部活動の成績や活動を継続している生徒の進学状況も良く、文武両道が実践されている。
- ③ 全職員で進路指導に取り組む体制が整っており、成果を上げているばかりでなく、パラグラフを活用した進路指導といった新たな取組みも行われている。
- ④ 学校保健計画は綿密であり、生徒自らが健康に関心を持ち、健康管理に努める態度を養わせようとする意図が感じられるとともに、指導・相談に関する組織体制は整備され、心と体の健康面からのサポートが行われている。
- ⑤ 危機管理マニュアルが充実しており、定期的な見直しもなされ、必要箇所はコピーを掲示するなど、活用のための工夫がされている。
- ⑥ 重点目標に沿った予算要求がなされ、施設・設備の安全・維持管理のための点検、改修や営繕要求などが適切に計画されている。
- ⑦ PTAの各種行事への保護者の参加率は極めて高く、土曜日の自習室の開放を保護者の協力で実施するなど、教育活動の支援に保護者が熱心に取り組んでいる。

一方、以下は、今後改善していただきたい主な事項である。

- ① 適切な勤労観・職業観など主体的な進路を選択する能力・態度の育成のための指導が十分とは言えず、「鳥取学」校外学習やパラグラフを活用した進路指導など、新たな取組みによる今後の成果を期待したい。
- ② 適切な校内研修は実施されているが、個々の職員の研修成果を学校の財産にしていく取組は十分とは言えず、まだまだ改善の余地がある。
- ③ 管理職は、部活動指導の負荷の平準化や、時間外勤務申請の適正化などについて、特定の者に加重負担か掛からないよう検討していく必要がある。
- ④ 自己評価に関して、各教職員が議論を尽くして意志統一を図るような取組が不足している。
- ⑤ 生徒による授業評価の結果をどう授業改善に生かすかが個々の教職員、教科内の判断に任せられている傾向があり、教職員全体で共有化されていない。
- ⑥ 保護者アンケートは部分的な対象・内容にとどまっており、保護者から直接意見を聞くなど、幅広く意見収集していく必要がある。
- ⑦ ホームページの更新体制を確立して更新頻度をアップしたり、ホームページ自体の周知方法を工夫するなどの取組が必要である。
- ⑧ 多くの保護者や地域からの学校に対する要望などをすくい上げて、それらの意見を学校運営に生かそうとする取組を充実すべきである。

平成 22 年度 智頭農林高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

智頭農林高校は、自然豊かな環境に恵まれ、質実剛健を基本方針として特色ある専門教育を行う高校である。農林業は国民生活の基礎部分であって、園芸科学科・森林科学科・生活環境科は人々の生活や幸福を支える礎であり、今後脚光を浴びる学科と考えられる。特に植物のバイオ技術や木材加工技術は当校の伝統技術であり、今後も世界に通用する **only one** 技術の可能性を有している。これらの技術開発や伝統の維持については、県や他教育機関との連携を含め今後検討して頂きたい。

生徒の基礎学力向上のために実施されているマルチベーシック授業の取り組みは、生徒に基礎学力をつけるために有効かつユニークな方策であり、学校全体の取り組みとして運営され、効果を上げている点は大いに評価できる。また、現状に満足することなくシステムの改善努力が行われており、より効果的な仕組みとして発展することが期待できる。

基礎学力の定着、規範意識の醸成、朝読書の推進、授業力の向上、資格取得挑戦者の増加、以上 5 つの具体的目標を定め、教職員が一体となって学校改善に取り組んでいる。難しい課題も多々あるが、ひとつずつ着実に改善していこうという意気込みが伝わってきた。今後は、チーム力を一層発揮し、課題の克服に取り組んで頂きたい。

また、「学ぶ喜びを実感させたい」「達成感を味わわせたい」「インパクトのある授業をしたい」など、愛情と志とをもって教育活動に取り組む教職員個々の真摯な姿勢を確認でき、それが日々の教育に活かされているものと思われる。今後は、より組織的な取り組みとして教育の質の向上や授業の改善に反映してもらいたい。

以下は、評価チームとして高く評価し、今後も継続・発展させて欲しい点である。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 朝読書は、静粛な雰囲気の中で行われ大きな成果を挙げている。朝読書を契機として、図書館の利用者数が平成 21 年度比 6 割増、貸出し冊数が同 8 割増となり、大幅な向上を示していることは評価に値する。朝読書に留まらず、より発展的に読書が推進されることを期待したい。② 生徒による授業評価の結果がよく分析され、授業に反映されている。③ 進路指導においては、現今の厳しい雇用情勢の中にあって、100%に近い就職率を得ていることに敬意を払いたい。この要因には、進路指導部通信「質実剛健」の頻繁な発行・配信や、インターンシップの充実した取り組みなどがあることを付記したい。④ 管理職を中心にして、生徒指導や基礎学力の向上に努力していることが認められる。⑤ 生徒が育てた農産物や作品を町民に販売する学校祭を通して、生徒のやる気を引き出す努力をしている。 |
|---|

一方、今後更なる改善を期待したい点と、評価委員としての提案を以下に記す。

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none">① 生徒の服装を正すためには、例えば、教職員自身が TPO に応じてきちんと着替えをするなど、模範を示すことが有効である。② 粛々と学校運営が進められているが、全体的雰囲気として明るさや活力が少し不足しているように感じた。③ 平成 21 年度から始まった朝読書は、前述のように成果を上げているが、全員参加に至っていないように思われた。今後は、この取り組みの完成度を高めて頂きたい。④ 教職員に接するときの生徒の笑顔や、積極的な挨拶がないことに併せ、歩く姿や授業態度から、学校生活の楽しさが理解できていない生徒も見られた。⑤ 生徒の多様性に伴い指導の困難さが生じており、そのことが教職員の心のゆとりを無くし、状況をより難しくしているように思われた。⑥ 智頭町が開催している「どうだん祭り」、および学校の文化祭と合同開催の「智頭町農林業いきいき交流祭り」に、学校としてより積極的に参加し、生徒が地域とつながっているという実体験をさせると、生徒の服装や授業を受ける態度も変わってくるのではないかと思われる。 |
|---|

生徒一人一人の成長を願う教職員の気持ちと心意気は、評価委員に十分に伝わってきたが、それを具現化するための取り組みにおいては、上述のように改善の余地があると感じた。学校教育だけでは限界があると考えられるので、今後は保護者・地域と学校が一体となり、更に教職員の自らも変わる積極的な姿勢により、生徒の全人的育成を目指していただきたいと考える。

平成 22 年度 倉吉西高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

10年後を見据えた人間力を高めるための中長期目標を設定した上で、学校の特色である「倉西夢きらりアクションプラン」を実践し、生徒の実態、社会の変化や学校の課題を客観的に把握し、教育の適正化を図ろうとする学校の姿勢を高く評価する。校長は、自らの学校経営のビジョンを教職員通信で伝え浸透を図り、教職員もその意図を理解し、協力・協働体制を整え、生徒の良さや可能性を見出し、生徒の自己実現達成のために一丸となって教育活動に取り組んでおり、学校全体の活力を感じた。「チャレンジグループ活動」や「フィールドワーク in 関西」など学校の多くの教育活動では、学ぶ意欲を喚起したり、好奇心をもって挑戦する機会がある。これらの体験的な学習を通じて、生徒が自分の将来像をイメージしながら進路選択できるシステムづくりに成功し、進学実績を向上させ、地域の信頼を得ていると見ることができた。

委員会として、高く評価し、今後も維持・発展させて欲しいとしている点は、次の5点である。

- ① 豊かな知性と幅広い人間性の育成を柱とする「倉西夢きらりアクションプラン」を策定し、それをもとに特色ある教育推進を行い、成果を上げている。
- ② 地域の教育力を積極的に導入・活用した横断的な教育活動を展開することにより、生徒の社会に対する理解を深めるとともに、自己理解をした上での適切な進路選択が行われている。
- ③ 生徒の学ぶ意欲を引き出し自信と達成感を与えようとする学校の姿勢や教師の働きかけなど、学校全体の進学に対する積極的な雰囲気が醸成されている。
- ④ 学校関係者評価からの意見や提言に的確、迅速に対応しているなど、即行動する意識が教職員に徹底されている。
- ⑤ 学校便りや学年便りの月一回ペースでの発行、ホームページやメール配信サービスなど、教育活動への理解と協力を得るために積極的な情報発信に努めている。

一方で、委員会として課題として捉え、改善していただきたいのは、次の5点である。

- ① 服装指導について、担当グループにやや負荷が掛かっており、学校全体の問題として取り組む体制を整備する必要がある。
- ② 授業改善については、授業アンケートの結果分析が個々の教員や各教科に委ねられており、学校組織全体としての取組には至っていない。
- ③ 勤務時間管理への配慮がなされているが、昨年度の調査では、年間をとおして0時間の者が9名あり、時間外勤務申請が適切に行われているか危惧する。
- ④ 予備校や先進校等での研修で得た知識やノウハウを全職員に還元する方策が十分でない。
- ⑤ 自己評価表の現状、目指す姿、達成のための方策が連動していない。

現在、倉吉西高では、明確な教育方針のもと、教職員一丸となって、生徒の学ぶ意欲の喚起や学力の質的向上及び大胆な組織改編に取り組んでいる。これらの課題を解決し、一層活力のある学校へと発展されることを期待したい。

平成 22 年度 倉吉総合産業高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

学校長をはじめとする管理職の高い教育目標が明確にあり、教職員が一体となってそれを実現していこうという志が共有されている。そして、その高い目標に向けて様々なアクションがとられていることが確認できた。校長は、職員会議の中で教職員と直接対話することによってその考えとビジョンの浸透を図っており、教職員は対話の中からその共有を図っているといえる。また、教員間のコミュニケーションも確実に行われ情報共有が図られるとともに、教育実践の中で若手教員が育てられていることがわかった。その結果、教職員及び生徒の明るい雰囲気と信頼関係が学校全体に感じられた。

当該高校の重点目標の一つは、「地域・地元へ愛され、信頼される学校づくり」であり、これを具体的に実践している。地元企業との連携・協力、保有技術の地域での活用、校外でのあいさつ、などがその例である。これによって地域と一体となった複合的学校教育を行うことができているし、地域が自慢できる学校となりつつあると見ることができた。

以下は、委員会として高く評価し、今後も継続・発展させて欲しい点である。

- ① 5つの学科の特徴を活かし、活気ある学校運営がなされている。例えば、生徒によるショップ「くらそうや」は、生きたビジネスを体験するという、教室内の授業では得ることのできない学習経験であり、学校全体の活気を生み出している。
- ② 当校の特徴のひとつと言える「あいさつ運動」はきわめて重要で評価に値する。評価委員は複数回にわたって倉吉総合産業高校を訪問したが、いつも生徒の側から大きな声で挨拶を受けた。
- ③ 生徒の遅刻を減らす取り組みも特徴的である。クラス毎の遅刻数および遅刻率を毎月求めて掲示することによって、生徒の認識と自覚を促し、理由によらず遅刻しないことを目指ように指導している。同様に、問題への対応も「迅速」で「他に波及させない」など、学校全体で適切に処理されている。
- ④ 総合産業高校としての特殊な施設や設備が数多く整備、活用され、授業は教員の工夫や努力によって分かりやすいものとなっており、生徒は楽しく受講して授業内容を理解している様であった。
- ⑤ 部活動や課題研究は全国レベルの生徒の活躍が数多くあり、全体的に活性化が図られているといえる。

一方、今後更なる改善を期待したい点を記す。

- ① 学校評価アンケートは役員だけでなく、一般のPTAにもアンケートをとり、PTAの意向を知る努力を望む。
- ② 教員は他教科の授業も見て、自分の授業では見えない生徒の様子を知るとともに、自分の授業に生かせる指導法を得る研修を望む。
- ③ 朝読書及び授業への図書館の積極的な活用は今後の課題である。

当評価委員会は倉吉総合産業高校の教育体制とその活動を高く評価するが、更なるレベルアップは、課題研究や部活動の指導者の育成強化によって一層推進されるものと考えている。現在行われているインターンシップ、くらそうや、中学校の生徒や教員の体験入学等による地域社会との連携や、学校独自の「ものづくりの技術や技能・販売・デザイン・資格取得」等を行いつつ、更に固有の活動を実践することによって一層の展開を期待したい。

平成 22 年度 境高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

学校長が、学校（単位制）や生徒の実態をよく把握して、それにそった教育ビジョンを持ち、学校運営を行っている。特に進路指導が充実しており、教職員集団からは、進路指導の熱意と生徒への愛情を感じた。また、生徒の学力を向上させたいという思いから様々な取組が実施され、各取組について教職員の共通理解がある。特に、課外講習や早朝・放課後の学習時間を確保するなど教育環境の整備に努めている点は高く評価できる。総合的な人間教育も充実しており、隣接の小学校児童との交流は、他の学校に誇れる事業である。

一方で、教師が生徒の学力向上のために生徒のアンケート結果を有効に活用したり、授業改善を積極的に行ってほしい。教師同士が生徒の様々な情報を共有し、それを授業や進路指導に活用すれば、さらに生徒の力量は向上すると思われる。また、各分掌の日常の仕事に対する規定類と各々の手順書が必ずしもリンクしていないことは課題であり、5W1Hに配慮した文書化と責任権限表も合わせて作成する必要があると感じた。

以下は、委員会として高く評価し、今後も継続・発展していただきたい事項である。

- ① 教育目標に数値目標を掲げ、具体的に活動出来るように配慮されている。
- ② 学校長が全教職員に学校・生徒の実態にそった学校教育ビジョンを明確に示し、教職員とのキャッチボールがうまく出来つつある事が窺える。
- ③ 年間を通して小学校児童との交流をするなど特色を作っている。
- ④ 命の大切さの指導や学校保健についての計画、実施体制が確立しており、生徒の健康状況が良好である。
- ⑤ 生徒指導において、校内全体で取り組む姿勢や体制が出来ている。
- ⑥ 生徒や保護者を対象としたアンケートを実施し、現状を素直に把握しようという姿勢がある。

また、以下は、委員会として課題と捉え、今後さらなる改善を期待したい事項である。

- ① 生徒の学力向上には教師の授業改善などで授業力アップが不可欠であるが、研究授業の実施や教員同士が互いに授業を見合う機会が少ない。
- ② 生徒のアンケート等の結果分析、対応策が不十分である。
- ③ 図書の仕事に関して、PDCAがはっきり分かる年間事業計画書がない。
- ④ 文書管理について、口頭での説明が多く、仕事の基本となる規定類や手順書についての旧文書と最新版文書の区分け、分掌ごとの文書であることの区分け、改訂・追記による記録等を明確にするために採番の管理ができていない。
- ⑤ 設備の点検が目視なのか器具を使用しての良否判断が分かりにくい。
- ⑥ 教育委員会との連携を密にしてほしい。

これらを解決していくには、教職員の意識改革が必要であると考えます。また、学力向上と心の教育とは両輪であるので、現状に満足せず、今後も両者をリンクさせ、一層充実した指導がなされ、生徒の人間力を伸ばしていくことが望まれる。しかし、教職員は生徒を熱心に指導するあまり、超過勤務の状態になっているのではないかと心配である。教職員の時間外勤務の管理について、早急な改善をお願いしたい。

平成 22 年度 日野高等学校 第三者評価 評価書

【講評】

学校長は特性（総合学科）を生かし、地域に貢献できる人材の育成を目標にし、「日野高ショップ」や地域の事業を行うなど地域との連携に力を入れた学校づくりをめざし、学力向上、生徒指導を行っている。また、生徒の人間関係づくりのために QJ を実施したり、「改善指導カード」を導入したりして生徒指導体制を整備している。このように、学校目標の中に重点目標を掲げ、それに向けての取組、努力の成果が見受けられ、総合学科高校としての底力もあるので期待する部分は大いにある。

一方、学力面では生徒の基礎・基本の定着が課題と思われる。教職員の授業研究など日常的な努力による授業力向上が不可欠である。また、仕事の基礎になる手順書はだれでもいつでも対応できるようにさらに充実させる必要がある。聞き取りの中で、生徒の心の闇・痛みにも踏み込んで行く学校長の姿勢に苦悩が滲み出ている。今後の学校長のさらなる指導力を期待したい。

以下は、委員会として高く評価し、今後も継続していただきたい事項である。

- ① 学校の重点目標をきちんと打ち出し、達成に向けて日々の活動の努力が見受けられる。
- ② 学校長は各方面と連携し、学校の実態に合ったビジョンを適確に設定、実践している。
- ③ 実習などで社会人の積極的な活用を行い、社会への足がかりを進めている。
- ④ 人間性を高めるための HR 活動、総合的な学習の時間、学校行事を体系的に実施している。
- ⑤ 生徒の問題行動に対する迅速な動き、教職員への周知徹底など、学校全体の生徒指導に取り組む体制を整備し、家庭との連携も良好で、きちんと機能している。
- ⑥ 学校保健の体制が確立され、観察、日誌への記録、管理職への報告等、生徒の日常の健康管理は評価できる。
- ⑦ 生徒・保護者へのアンケートの実施で学校の現状を把握し、それを自己評価の目標設定、教育活動の改善に役立てている。
- ⑧ TEAS II の導入により、生徒・教職員の環境に対する意識が高く、実践もしている。
- ⑨ 授業参観をしてみて、日野高校卒業生は誰もがコンピュータが使えること、家で介護ができること、基本的な漢字の読み書きができることなど、具体的な事柄について授業が行われており、指導にきめ細かい面もあると感じた。
- ⑩ 1 年次に習熟度別授業（英・数・国）を行うなど、入学時の生徒の学力的な困難を克服する努力が行われている。
- ⑪ 学校の特色のひとつである郷土芸能を伝承する取組が積極的に行われ（小学生、中学生へのアプローチ等）、地域に密着しようとしている。
- ⑫ 学校長の日々の努力により、教育委員会との連携がよく取れていると感じた（学校長の大きな任務である）。

また、以下は、今後改善していただきたい事項である。

- ① 学校長は、個々の教職員の授業力向上には機会を捉えてさらに力を入れてほしい。
- ② 卒業後を見越して、生徒の基礎的・基本的な学力定着のための具体策立案が必要である。
- ③ 生徒の基礎的な学力を向上させるために、教職員の授業力アップの研鑽が必要である。
- ④ 報告・実践記録の整備、安全点検手順や規定類等の 5W1H に配慮しての文書化をし、誰でも対応できるようにする必要がある。さらに、既にあるもの見直し、改訂版の作成等、充実させる必要がある。
- ⑤ 生徒の通学範囲が広いので、保護者の PTA 活動の積極的参加を働きかけたい。
- ⑥ ほとんど教室を移動する授業だが、人間関係を深めるために、教室のロッカーの整理や掲示の工夫など、学級の教室をもっと大事にする必要がある。
- ⑦ 生徒指導は学校生活全体で行う必要がある（授業中の生徒の服装、言葉遣い、態度等の指導）。
- ⑧ 学校全体にもう少し活力がほしい。生徒会活動を活性化させて、また、教職員の積極的なサポートで学校の雰囲気盛り上げて、生徒に誇りを持たせたい。
- ⑨ 組織運営面で、校務分掌図の作成、文書管理の在り方についての検討を要する。

平成 22 年度 鳥取養護学校 第三者評価 評価書

【講評】

学校長を中心として、全職員が「青いバラを咲かそう＝夢かなう」を合言葉に、児童生徒こそが主人公であると認識し、しっかりと一人一人の特性を見つめ、その可能性を信じ、成長するための舞台を作り上げようとする姿勢と取組の様子を感じることができた。

小学部から高等部まで幅広い年齢層で児童生徒数が均一でなく、多様な障がいのある児童生徒が在籍している。このような状況の中、必要な支援・情報の発信について地域支援部の活動を模索しながら関係機関と連携していく取組を進めようとしている。また、卒業後を見据え、個別の教育支援計画に基づき、個別の指導計画等によって計画的に学習を進めるよう職員の共通認識を高め、一貫した教育的支援の体制作りを指向している。そして、課題については保護者や関係機関からの意見を真摯に受け止め、改善に向けて努力をしている。

委員会として、以下の点については高く評価できると考える。

- ① 多様な実態の児童生徒が在籍しているが、一人一人の障がいの状態や程度に応じて、授業作りや支援の仕方等の面で個に応じた工夫がなされていたこと。
- ② 前年度踏襲ではなく、学校関係者による評価や自己評価の結果を真摯に受け止め、改善に向けて取り組みながら、よりよい学校経営、開かれた学校作り、児童生徒や保護者への積極的な情報提供に努めていること。
- ③ 小学部の段階から計画的に保護者研修等の機会を設け、卒業後に向けて進路指導を推進していること。
- ④ 職員数の多い組織であるが、必要な会議や各種研修等を効率的かつ効果的に実施できるように、内容や議題の精選、視点を明確にした提案の仕方の提示、提案時間を守ることへの意識向上等、学校全体で工夫して取り組んでいること。
- ⑤ 廊下掲示や会議におけるプレゼンテーション、児童生徒の学習の様子をすぐにスライドやDVDにして保護者に公開する取組が情報を分かりやすく見える形にしていること。

以下は、今後さらなる改善を期待したい点である。

- ① 様々な計画書やマニュアルを作成している点は評価できるが、医療的ケアを必要とする児童生徒に対する緊急時の対応や、防災管理規定等、より分かりやすく図式化したり、文書等の作成年月日を明記したりするなど、職員間で一層確実に周知できるよう、さらなる工夫をしていただきたい。
- ② 重度の障がいのある児童生徒がより主体的に活動したり、コミュニケーションを図ったりすることができるよう、スイッチ類を含めた機器の効果的な活用を図っていただきたい。
- ③ 心身症をはじめ、精神科医との連携を必要とするケースが増えてきているものの医療機関とのつながりについては模索中であるという現状を鑑み、今後一層、関係機関との連携を深めながら教育活動を進めていただきたい。

平成 22 年度 皆生養護学校 第三者評価 評価書

【講評】

幼児児童生徒の実態に応じた教育活動の実践に努めようとしている。「18歳で自立できる人を育てる」というミッション達成に向けて、幼稚部から高等部までの14年間における一貫性と幼児児童生徒の実態及び学部の特性に応じた指導を積み重ねていることが感じられる。

幼稚部から高等部までの幅広い年齢構成に加え、多様な幼児児童生徒一人一人の実態に応じた姿勢づくりや視覚等の認知面への支援をもとに学習環境や授業づくりが行われている。保護者や関係機関、地域等との連携を図っていきながら、現在成果をあげている点はさらなる充実を、課題については前向きな改善を図っていただきたい。

以下は、委員会として高く評価し、今後も継続していただきたい点である。

- ① 幼児児童生徒一人一人の障がいの状況等に応じて、姿勢や身体の使い方に関すること、認知の特性に合わせた学習の仕方に関することなど、障がい特性に配慮した環境づくり・授業づくりが行われていること。
- ② 総合療育センターとの連携により専門性を十分に活用している。また、特別非常勤講師や社会人講師等も活用し、教材教具の工夫・開発を行い、授業改善に生かしていること。
- ③ 自己評価の評価項目と学部間連携のあり方についてポイントをしばって検証と改善を行い、重点課題に対する評価項目の設定を行っていること。
- ④ 各種だよりをはじめ、ホームページへの公開等により数多くの情報発信を行うとともに、アンケートによる要望だけではなく、保護者からの直接の声を受け止め、改善を図っていること。

以下は、今後さらなる改善を期待したい点である。

- ① それぞれの学部で該当学部の指導計画の見直しを行う際に、学部間における系統性を考慮した見直しも行き、指導計画等における学部間の系統性・継続性がわかりやすくかつ実践されるよう期待する。
- ② 人権教育、性教育等それぞれの教育活動の全体計画をもとに学部ごとの計画が立てられ、学級、個人の年間指導計画が立てられているはずなので、個別の指導計画との関連をより進めていくことを期待する。
- ③ ミッションとしている「18歳で自立できる人を育てる」の“自立”についての概念定義が必要かと思われる。社会通念上の「自立」とは異なる皆生養護学校独自の「自立」についてのとらえ方について、全教職員の共通理解を図るために年度当初にとどまらず、学期末のまとめの際に振り返りながら再確認し、深めることを期待する。また、「自立」について保護者への説明及び共通理解をさらに推し進めていただきたい。
- ④ 本校における問題行動のとらえ方（心理面における問題等）を再考し、週1回の学部における幼児児童生徒の情報交換に生かしていただきたい。